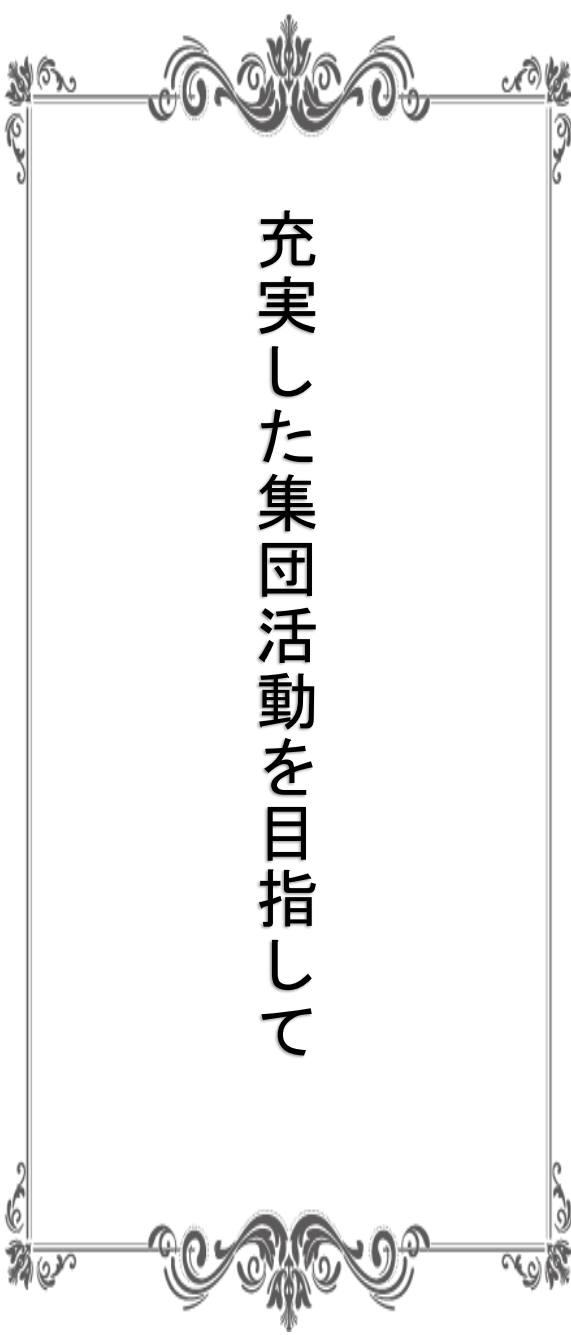




充
実
し
た
集
団
活
動
を
目
指
し
て

いいことづくし学級会

教員生活半ば、個人研究として学級活動（１）の「学級会」に力を入れるようになり、前任の鹿沼市立北押原小学校においては、特別活動の研究指定校となり、「学級会」の実践研究を中心となって進めてきた。

特別活動における主体的・対話的で深い学びの実現を図る上で、学級会は、まさに「いいことづくし」であることが、研究を重ねるうちに身をもって実感できた。計画委員として司会や黒板記録を誰もが経験できる素晴らしさ。「自分もよく、みんなもよいように」決めていく合意形成のすべを学ばせることができる素晴らしさ。決まったことをみんなで実践することで、児童同士によりよい人間関係が構築できる素晴らしさ。さらに、自分の意見には必ず根拠をもち、それを明確に伝える力が付いてきて、教科の学習にも生かされてくる。出された意見を分類し、みんなが思考しやすいように整理する力が付いてくる。

「Aさんは、だから反対なんだ」「Aさんの考えはこっちに近いかな」と友達の思いを聞き取ったり聞き分けたりする力も自ずと付いてくる。学級会が学力形成の基盤となっていくことを実感した。「Bさんの考えもよいと思うのですが、〇〇の心配があるので、今回はやらなくてもよいと思うのですがどうか」と相手を傷付けない言い方も学べる学級会は、人権教育そのものである。学級会のいいことを挙げるときりがない。

私が実践した中で、心に残っている学級会がある。「集会でやること」が二つ決まったのだが、どうしても合意できない子がいた。さあどうする、助言が必要か…と考えていた時、さっと手を挙げた児童がいた。「じゃあ、Cさんがやりたいのも少しやって、決まっ

た〇〇も少しやって、△△も少しやるのはどうですか」と、みんなもその子も、それならよいと言える考えをひねり出したのである。みんなでよりよく生活していく方法を考えていく、そんな思考力が身に付いてくることを感じた学級会だった。そして、その年の三月には、「もうすぐ四年生だね春パーティをしよう」が提案されたり、一年間の学級会の議題をすべて書き込んだ思い出カードを自ら作ってみんなに配る子がいたり、学級会の実践が学級生活の充実につながっていったのを感じた学年末となった。

学級会を通して、豊かな学級生活を自分たちでつくる経験を積むと、児童会活動やクラブ活動での話し合いも上手にできるようになった。私が担当していたバドミントンクラブでは、「今日は二対二で試合をします。どんなルールにしますか」とクラブ長の司会で話し合いが始まると、「十点マッチがいいと思います。五点だとすぐ終わっちゃうからです」といった発言が出るなど、学級会での経験を生かした話し合いができた。児童会代表委員会での運動会の話し合いでは、テントに全校生が描いた競技のイラストを飾り付けるというアイデアが出た。保健委員会では、全体練習の前にじょうろで校庭に水まきをする打ち水作戦はどうか、という面白い意見が出た。また、通常の委員会活動では、ペットボトルのキャップを集めていた環境委員会が、集まったキャップの数当てクイズを企画し実践した。翌年はさらに進化し、キャップでリサイクルおもちゃを作ろうという意見が出て、一年間かけて地道に製作した。飼育委員会発案のうさぎのえさやり体験もみんなを楽しませた。

自分たちで話し合って楽しい学校生活をつくるアイデアの原動力は、「学級会の経験」にほかならない。

六年生を成長させる縦割り班活動

私がこれまで勤務してきた学校では、活動内容に違いはあるものの縦割り班活動が行われていました。そして、縦割り班活動が特別活動の基軸となっていました。

私が二校目に勤務したY小学校（当時の児童数約七百八十人）では、体育主任や特別活動主任と共に、運動会での縦割り班の運用について、先生方と議論を重ねた思い出があります。それまでの運動会は、紅白対抗で行われていました。子どもたちにとって思い出深い行事の一つではあったのですが、「子どもたちの活躍できる場を、もっと増やしたい」「運動会にもっと主体的に取り組ませたい」という思いから、縦割り班を基に全校を四グループ（四色・赤青黄緑）に分けました。必然的に応援団員や選抜リレー選手は、色ごとに存在することになり、活躍できる子どもが増えました。また、運動会にはスローガンがつきものですが、全校のスローガンに加え四色それぞれのスローガンを子どもたちに考えてもらいました。合わせて、各色のキャラクターのアイデアを募集し、子どもたちが決めていきました。その後、応援団員を中心に決起集会を開き、結束が高まりました。そして種目に縦割り班対抗種目を設けたり、当日の応援席を色ごと・縦割り班ごとにまとめたりすることで、色ごとの一体感が生まれました。これらの取組により、子どもたちの運動会への意欲をこれまで以上に高めることができ、運動会は大いに盛り上がりました。運動会のほかにも、常時活動としての縦割り班共遊や、児童会活動としての「縦割り班ウォークラリー」などが行われており、これらの活動を通して子どもたちの成長が認められました。

三校目のT小学校（当時の児童数約二百人）では、体育主任としてY小学校での経験を

生かし、縦割り班を基にした運動会へと変更しました。児童数が少なかつたため四色対抗とまではいきませんでした。縦割り班を随所に活用することで期待していた効果が得られました。T小学校で特色のある活動に、「大小山縦割り登山」があります。学区内にある大小山（標高二八二m）に縦割り班ごとに、ウォークラリー形式で登山するという児童会行事の一つです。登山では、高学年が低学年のペースに合わせたり、荷物を持つてあげたり、手を引いたりという姿がごく自然に現れ、縦割り班の絆が深まる行事でした。

現在の勤務校である東山小学校にも縦割り班活動が存在します。児童会行事「スマイルマーケット」は、縦割り班ごとに体験型のブースを企画し、それらの運営や体験を通して縦割り班の絆を深めることができます。

以上のような縦割り班を基軸とした様々な活動を通して、特に六年生児童の成長が感じられました。私自身、高学年、特に六学年を担当する機会に恵まれてきました。縦割り班活動に際して、六年生児童一人一人が縦割り班のリーダーとしての自覚と自信をもって行動できるように、不安を徹底的に取り払ってから活動に臨ませてきました。活動中は特に六年生児童に対して、下学年児童に聞こえるように称賛の言葉掛けをするように努めてきました。こうすることで、六年生児童が自分に自信をもつことに加え、下学年児童が六年生児童への信頼度を高めることを期待してきました。

今のコロナ禍において、縦割り班活動に様々な制限がかかり、これまでの活動ができない状況にあります。それでも可能な限り実施していくことで、子どもたちの成長する機会を、特に六年生児童の成長する機会を確保していきたいと考えています。

足利市立東山小学校

永島 厚洋

特別活動で生徒も成長、私も成長

「生徒会活動やってみない？」私が特別活動の世界に足を踏み入れ、魅入られることになったきっかけは、新採のときの先輩教員の一言だった。さらに他の同僚に言われた一言、「特別活動で学んだことは学級経営に生かせる」の言葉に、やってみたい以外の選択肢はなくなった。

その後、特活主任、教科指導員などの立場になり、特別活動（特に学級活動）について学べば学ぶほど、奥が深いものであると知った。また、教科等の中でも特に、生徒や学級、学年の大きな成長が期待できる時間であると感じた。実際に多くの場面でそのことを痛感した。

担任になった最初の頃は、「今度の学活、何やろう」と毎週悩んでいた。学活の年間計画はあるが、学級や生徒の実情に応じて、今必要である内容を取り上げることが効果的であるからだ。どうしようかと悩んでいたある日、生活ノートのコメントを見て、「そうか、学級のことは、生徒と共に考えていけばいいんだ」と気付いた。そこからは、毎週の学活の内容を考えることが楽しみになった。それまで以上に、生徒の普段の様子、表情、言葉を気に掛けるようになった。もちろん、生徒の目から見た学級、担任の目から見た学級、そして、他の教員の目から見た学級、それぞれの意見を参考に考えていくことが大切である。だから、生徒だけでなく他の教員との会話も大切にした。そうすると、学活でやりた

いことが増え、週一回では足りないと感じるぐらいになった。

学級の課題は、生徒が発見もしくは生徒が発見できるように担任がサポートする。そし

て、生徒が自分の気持ちと葛藤しながら、それぞれが折り合いをつけ、学級としてどうするか決定していく。この経験や学びの繰り返しは実生活につながり、生徒の行動の大きな変化につながる。また、個々の課題は、担任が生徒の実態に応じて課題を設定し、その課題を自分で考え一人一人が意思決定し、行動決定していく。自分自身を見つめ、今後どうするかを考え、行動に移すことは自己の成長には欠かせない。そして、学級や自己の課題と真剣に向き合った一人一人の生徒の成長の積み重ねが、学級の成長へとつながるのだ。

さらに、特別活動で生徒が大きく成長する機会として欠かせないのは学校行事である。特に学級ごとに取り組む行事では、つい生徒以上に熱が入ってしまう。でもそれは、勝ちたい気持ちや上手くやらせたい気持ちからではなく、生徒に味わわせたい気持ちがあるからだ。そのため学級で行事ごとに目標や合言葉を決め、その達成に向けて妥協せずに取り組んだ。行事ごとに目標や合言葉を決めるのは、生徒が行き詰まったときに戻る場所をつくるためだ。トラブルこそ成長のチャンス。行事に向けて順調に進んでいるときには、意図的に一人では解決が困難な課題を与えた。生徒同士で考え、乗り越えるからこそ、強い結束力や意志が生まれる。相手を想う優しさや気遣いが生まれる。それが、学級の成長につながる。ついつい手を差し伸べたくなることもあるが、ぐっと我慢して生徒の力を信じて待った。いつも、私が思っていた以上のことを成し遂げ、毎回泣かされた。そんな生徒たちに、行事が終わると賞に入っても入らなくても、担任の目から見て成長できたことに對しての賞をあげた。ベストチーム賞、ハートフル賞、結証（ゆうしょう）などなど。

とにかく、特別活動は奥が深い。今は学年主任。学年の成長のためにまだまだ勉強。

宇都宮市立豊郷中学校 松本 清美

部活動指導から得られるもの

私は現在、四校目の学校に勤務している。初任の小学校で野球部の顧問になったところから、私の部活動指導は始まった。二校目ではサッカー部とバレーボール部の顧問になり、その後異動した中学校ではサッカー部とソフトテニス部の顧問となった。現在勤務している市貝町立市貝中学校でも、ソフトテニス部の顧問をしている。

最近、部活動指導を避ける先生が増えてきているということをよく耳にするようになった。部活動に関して、まず頭に浮かぶのは、休日が少ないということではないだろうか。それはそのとおりだと思う。何年前かは、土日両方練習試合や遠征に行くことや、年末も大会があることなどが多かった。遠征や練習試合の場所が年々遠くなっていき、私の車の走行距離は二十五万kmという数字になってしまった。そして何より、家族には大いに迷惑を掛けたことも分かっている。私の妻も部活動指導に関わっているので、理解はしてくれていたのだが、そうではない場合も多いと聞いている。次に、自分がやってきた種目ではない顧問になってしまったらどうしようということである。私も野球、バレーボールに関して経験がなかった。野球部のときは、「雨が降ればいいのに」、バレーボール部のときは、「体育館が急に使用できなくなれば」などと変なことを考えたこともあった。

では、そんな思いまでして部活動指導をする意味とは何なのであろうか。

私は、その問いに関しては、「よりよい人間関係の構築」ということを一番に挙げたい。まずは児童生徒との人間関係。子どもたちは、部活動では教室と違う顔を見せてくれる。熱心に練習に取り組んでいる子、進んでボール拾いをしている子、挨拶を大きい声でする

子など、様々な顔を見せてくれる。子どもたちのそういう場面を見られることは、教員冥利に尽きると私は思う。また、生徒指導など、教室より部活動の方が指導しやすい場面もあり、児童生徒との信頼関係も築きやすいのではないかと思う。生徒を思い出すとき、すぐ思い出すのは部活動の生徒であることが多い。また、今でも、高校生や大学生、社会人になった教え子がテニスコートに訪ねてきてくれるのが私の誇りでもある。

そして保護者との関係。最近の保護者は部活動によく顔を出す。そこで顧問がどう振舞っているかを実によく見ている。ただ、教員が一生懸命やっていれば、それに対して不満を言う保護者は少ないだろう。そこに勝敗はあまり関係ない。教員が全力で取り組み、保護者も全力で支えてくれる。私も成績面だけでいえば、よかった年も、そうではなかった年もあるが、今まで多くの保護者に協力してもらい、助けてもらった。

最後に他の先生方との関係。様々な先生方とのつながりができ、そのつながりにたくさん助けられた。他県にも多くの知り合いの先生がで、連絡を取り合っている。また、バレーボール部顧問になったときには、当時小学校のバレーボールの県優勝監督だった先生に連絡をとって、練習会をしていただいた。そして、その十年後、その先生のお子さんを指導し、ソフトテニスの県大会で優勝することができた。人と人とのつながりは本当に不思議なものである。

現在の世の中が前と違うのは分かっている。しかし、部活動指導を通して得られるものは教員としても大きなことであることは変わらないと思う。

市貝町立市貝中学校 涌井 俊裕

先輩教師等から学ぶ部活動指導

初めて駅伝部を担当した当時、何をどう指導すればよいのか全く分からなかった。本やDVDを買って自分なりに勉強したが、どうもしつくりこなかった。「日本一を目指す」「世界で通用する走り」などの内容ばかりが目についたが、私が求める情報は見当たらなかった。私の悩みは、駅伝部から離脱したがる生徒をいかにして減らすかだったからである。「野球の方に専念したいので」や「勉強の時間がなくなるので」と言って特設の駅伝部から離れる生徒たちに、どうすれば駅伝へ気持ちを向けてもらえるのか。当時の私にとって、トップアスリート育成の教則本等の情報は、何の役にも立たなかったのだ。

私が「心から学びを得た」と言えるのは、現場で日々様々な課題を抱えながら奮闘されている先輩教師からの助言であった。しかし、聞こえてくる課題は「故障者が多くて」「など、私のチームに対する悩みとまるで違っていた。その先輩の率いる生徒たちは、結果を残そうと練習に励むあまり、故障するほど頑張り過ぎてしまうのである。生徒が練習に夢中になるような指導をしているという事実に感心すると同時に、「自分の指導は、練習への意欲さえ、もたせられない」という、自分への怒りや無力感を覚えた。しかし、そんな状況の私にまでも、先輩教師の方々は心を寄せて御助言くださった。私にとって欠かせない存在であり、これらの助言は、間違いなく私の財産となっている。

それからというもの、私は「この指導者の話をぜひ聞きたい」と思えば、できる限り足を運ぶよう努めた。県内はもちろん、東北から近畿、中国、四国地方まで。指導者の方は、私の知りたいこと、困っていることに的確なアドバイスをくださった。そのときに頂いた

資料や、聞き取ったメモは、私にとって最高の知的財産だ。やがて、これまで出会った尊敬する先輩教師や指導者には、幾つかの共通点を感じるようになった。①「こうすれば勝てる」「だからダメなんだ」と短絡的に法則化せず指導の多様性を肯定的に捉えている。②失敗を生徒のせいにしない。③言い訳、愚痴がなく、自己正当化もしない。④謙譲の美德を備えている。⑤さも分かっているかのような口ぶり、評論家の如きもの言いがない。⑥発する言葉の一つ一つに重みがある、などのことが挙げられる。

⑥に関して、我々教師が生徒に対して発する言葉には、生徒の成長につなげる明確な意図があるべきだし、発した言葉には責任をもつべきだと考えている。部活動に限ったことではなく、授業でも学年集会でも、何を話すべきか、話さざるべきかを考え抜いたうえで話すことが大切であると思う。

駅伝は、レースがスタートすると、選手が一人で勝負しなければならない。ともに汗を流してきたチームの仲間が傍にいない。これがトラックレースとの大きな違いなのだろう。だからこそ、本番は一人一人が的確に状況を判断して走る必要がある。そのために、あらゆる状況を想定させる。「気温が高くて」「風が強くて」など、失敗したときほど言い訳をしたくなるものだが、これではライバルに勝てるはずがない。私が常々生徒に伝えていた言葉の一つが「精強・即応」である。どれほど不利な状況下であっても戦い抜く強靱な精神力、いかなる状況の変化にも即対応する力を身に付けるべきと伝えてきた。

これからも、「教師にとって最大の『武器』は言葉である」との先輩からの教えどおり、生徒に伝えるべき最良の言葉を吟味し続けたい。

大田原市立野崎中学校

高橋 尚孝

自分を生きる

保育園時代から集団生活が好きではなかった。学校生活はいつも何となく違和感があった。何となくもがきながら過ごした学校生活の中で、どうして学校に行くのか、学校は何を学ぶところなのか、そんなことを考えるようになっていた。学校に行かなければならないというのであれば、自分が教員になって、どんな生徒でも学ぶ楽しさに気付き、自分らしさを発揮できるように共に過ごしたいと考えるようになった。

初任校は、自分の可能性を信じることができない（頑張ることができない）生徒が多い学校だった。そこでは生徒と共にたくさんの「特別活動」に取り組んだ。「特別活動」には、学ぶべきたくさんのことが詰まっていると信じていた。学校行事にはクラスで簡単には成し遂げられないことにあえて取り組み、合宿など何度も行った。生徒会でも生徒自身が行事を動かすよう、合宿を行い、多くの時間を共に過ごした。部活動もあり。その中で生徒たちは「自分たちでもできる」「集団の中に自分なりの役割が必ずある」「精一杯やると充実感があり、本当に楽しい」と実感し、普段の学校生活の中でも表情や行動が変わっていった。それは特別活動だけにとどまらず、学習をはじめ、様々な活動に前向きな姿として見られるようになった。同僚の先生方とも、たくさんのことを話した。学校を、生徒をどうしていくか、多くのことを共に考えた。初任校でのこの経験が私の土台になっていくように思う。

二校目は、前向きで素直な、でも自分から行動することが苦手な、自分の進路を自分で決められない生徒が多くいる学校だった。なぜ勉強するのかという問いに自分で答えを見

付け出せるようになってほしいといつも考えていた。そして、その答えも「特別活動」の中にあると考えていた。何か行動を起こそうとしたとき、もつと上のレベルに行こうと考えたとき、必要となるのが「知識」や「協働する力」や「表現力」や「課題発見・解決力」であり、それはまさに「課題研究」で身に付くものだと思えるようになった。学校内での学びと自分の行動には深いつながりがあると生徒自身が気付く活動をいつも目指していた。そこで、学校内外関係なく生徒が活動する場面を多く設定するようになっていった。また、生徒が将来を考えるとときに「社会」という視点が欠けていると強く感じていた。身近な集団を含む「社会」の中の自分、「社会」の現状を考えて初めて自分の将来が見えるとも考えるようになった。教育課程の中に課題研究としての「ゆずも学」を入れ、地域連携に力を入れたのもそのような考えが土台にあったからである。その中で生徒だけでなく、教員も一緒に「課題研究」や「学ぶ」とは何かということを考えてきたように思う。

長く過ごした二校目から昨年度異動し、現在の三校目では、私はまだ自分にできることが見付けられずにいる。教員生活はまさに「課題研究」の毎日だ。でも、きっと生徒と過ごす毎日の中で「課題」は自然に見付かっていくのだと思っている。

誰もが心から安心して、自分らしく生きていける「成熟した社会」にしたいと願う。目指す人間像に「正解」はない。同じものを目指さなくていい。皆がそれぞれの持ち味で集団の中で役割を担う。大人になるに当たって必要な力は高校の三年間、どのように過ごすにかかっている。自分だけの何かを見付けてほしい。そう願って、私も自分にしかできない「何か」を見付けられるべく生徒の前に立つ。

県立宇都宮高等学校

田村 絵美

ものづくりの楽しさを伝えるために

工業系の高校には、機械や電気など、いろいろな分野のものづくりを学ぶことができる部活動があります。生徒たちにとっては、授業や実習で学んだ知識や技術が、実際のものづくりにどのように応用されているのかを学習できる、貴重な部活動です。

その中で、私が初任から現在まで指導を継続しているのは「ロボット製作」です。最初は、専門ではないのでどこまでできるのか不安でしたが、自分でロボット製作を学んでいくうちに、その楽しさと難しさを感じるようになりました。

高校生にとっては簡単ではないロボット製作を、部活動で行うメリットはいくつか考えられますが、私が大事にしていることは、

- ①ものづくりのプロセスを一から学ぶことができる。
 - ②作品を製作し、大会に出場することで、ものづくりの達成感や充実感を味わえる。
 - ③自分の所属している学科の知識以外の技術も学ぶことができる。
- ということ です。

①については、ロボット製作のプロセスとして、まずどんなロボットを製作するのかを目的に定めて考えることが重要です。そのイメージを元に図面を作成してから取り組まないと、目的どおりに動作するロボットを製作することはできません。また、製作後は動作を確認しながら、不具合があれば改善していくという作業を繰り返さなければなりません。これは、企業が商品企画から製品化まで行う工程とほぼ同じ内容です。高校生の段階でこのものづくりのプロセスを学んでおけば、就職してから絶対役に立つと思います。

②については、ロボット製作の目的意識を高めるためには、大会に出場することが一番だと考えています。何のためにロボットを製作しているのかを明確にするとともに、大会で優勝することを目標とし、真剣にものづくりに取り組むことで、完成した時の達成感や優勝した時の充実感を味わうことができます。特に、難しい課題に直面して、悩みながらもその課題を解決するためのアイデアを思い付いた時の達成感は、真剣に取り組んでいないと味わうことができない経験です。高校入学後に活躍の場を見いだせなかった生徒などにとっては、この達成感や充実感は、高校生活の中で貴重な経験になると思います。

③については、ロボット製作を行うためには、金属板を加工したり丸棒を削ったりする機械系の知識、基板を製作して配線するための電気電子系の知識、マイコンを使ってプログラミングを行う情報系の知識などが必要となります。そのほかに、木材を使ってコートを製作するためには、建築系の知識など必要となります。私が指導しているこの部活動には、いろいろな学科の生徒が入部してきますが、所属している学科以外の知識も自然と学ぶことになるので、自分の幅を広げることができ、三年生になってからの進路決定の際にも効果的で、就職してからも有効に活用できます。

このロボット製作は、知識の幅が広くとても難しいものですが、目的をもって真剣に取り組ませることで、主役の生徒は想像を超える成長を見せてくれます。

若手の先生方も、生徒に対して的確なアドバイスができるように、自分でも世の中の新しい技術などを積極的に学んで、ものづくりの楽しさをいろいろな形で伝えていただきたいと思います。

集団活動で成長する

学校行事、学級・ホームルーム活動、児童・生徒会活動等を含む特別活動。それらの活動に対して主体的に取り組む子どもを育てたい。でも、効果的な方法がよく分からない。このように悩むことはありませんか？ 活動後、子どもたちが「楽しかった、またやりたい」と感じていても、「活動あって学びなし」になっているかもしれません。

特別活動において、活動を通して学ばせる上で大切なことは、教師が活動のねらいと育てたい資質・能力を明確にすることです。そして、子どもたちにも「この活動を何のために行うのか」「どんな自分になれるのか」という見通しをもたせることが大切です。このことが、子どもたちの主体的な取組を促します。同じ目標に向かい、各教科・科目で育成された資質・能力を発揮しながら他者と関わり合って活動することで、よりよい集団がつくられていきます。充実した特別活動は、よりよい学級経営や学力向上、さらにはキャリア形成、問題行動の未然防止、道徳的な実践にもつながります。

本冊子の内容からも、特別活動を通して子どもが成長し、集団としても成長することが分かります。皆さんも子どもたちが活動後に大きく成長した姿を見て驚いた経験はありませんか？ 子どもの成長に関われることは、教職の大きな魅力ですね。

関係資料のご案内



「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動」
(小学校編)

国立教育政策研究所
2018年12月



「学級・学校文化を創る特別活動」(中学校編)

国立教育政策研究所
2016年3月



「学校文化を創る特別活動」
(高校編)

国立教育政策研究所
2018年8月